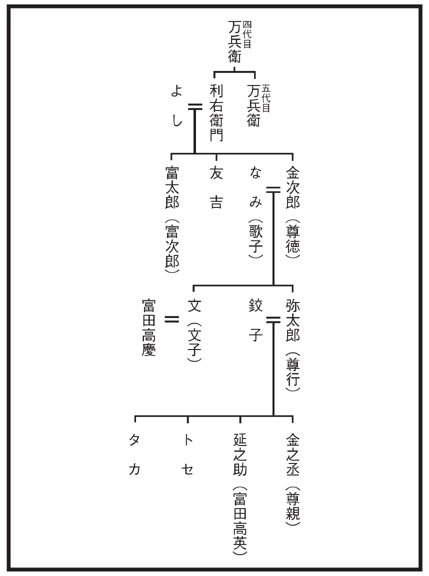
尊徳が亡くなってからどうなったの？―二宮家の人々―

尊徳の死後、報徳仕法は尊徳の子尊行を中心に行われました。

明治時代は、江戸時代とはちがい、政府を頼らず人々がお金を出し合い、それをもとに運営するといった新たな方法で実施されました。その中心になったのが尊行の子で、尊徳の孫にあたる尊親です。

尊徳の子文は、母歌子とともに、家事をやりながら仕法にかかわる事務的な仕事も行うなど、献身的に尽くしました。そして、一番弟子の富田高慶と結婚しましたが、残念ながら結婚してすぐに亡くなりました。文は、※書画の才能にすぐれ、多くの作品をのこしています。



二宮家の略系図

「良淑先生」
二宮尊行墓（二宮家富田家墓地内）

高慶と文との結婚

高慶と文とが初めて出会ったのは、天保 10 年（1839）に高慶が入門した時でした。その時高慶は 25 歳、文は 15 歳でした。その後二人とも尊徳のもと報徳仕法に尽くしたため、婚期が遅れてしまいました。こうしたなか､二人に縁談が持ち上がったのは嘉永元年（1848）ころで、文は 24 歳でした。しかし、尊徳にとって大切な助手である文がいなくなると困るため、ようやく結婚できたのは 4 年後の嘉永 5 年（1852）、尊行に鉸子が嫁いできた後で高慶 38 歳、文が 28 歳のときです。

二宮尊行のおこない

尊行は「たかゆき」とも読み、尊徳の長男として，文政 4 年（1821）に生まれ、弥太郎とも名のりました。安政 3 年（1856）、尊徳が日光での報徳仕法なかばにして亡くなると､その遺志を引きつぎ､報徳仕法に生涯をささげました。明治元年（1868）戊辰戦争が始まると、一家は中村藩に移り住みました。後に、明治 3 年（1870）藩の用意した石神村（原町区石神）の家に住むようになりました。しかし明治維新の混乱により、藩における尊行の実力は十分発揮されないまま、移り住んだ翌年の明治 4 年（1871）51 歳で亡くなりました。

※書画…墨を使い紙などの上に毛筆で書かれた文字や同じく墨や岩絵具を使い紙などに毛筆で描かれた絵画

二宮文の画「竹に雀」
（相馬市歴史資料収蔵館所蔵）

文のおこない

文は文子ともいい、尊徳の長女として文政７年（1824）に生まれました。早くから書や絵画に親しみ才能を伸ばし多くの作品をのこしました。また指導のため不在がちな父親尊徳に代わり教えを請いに各地から集まってくる入門者への対応にあたりました。そして父親のいろいろな事務的な仕事を手伝い､日記･手紙などの整理記録をするなど重要な秘書役でした。

嘉永５年（1852）、富田高慶と結婚しましたが，翌年病気のため亡くなりました。

ここ見てね!! P44・57

興復社の結成と二宮尊親のおこない

尊親は「たかちか」とも読み、金之丞、金一郎とも名のりました。尊行の子として安政２年（1855）に生まれた尊親は、祖父尊徳や父尊行の遺志を引きつぎ、明治10年（1877）富田高慶らとともに「興復社」をつくり、石神村（原町区石神）を中心に活動しました。

明治23年（1890）社長の富田高慶が亡くなると、副社長の尊親が社長になりました。そして興復社の事業を北海道の開拓にしぼり、十勝国に相馬地方の人々をはじめ多くの移民を送り開墾をすすめました。明治30年（1897）「北海道牛首別興復社」を設立しました。以後10年間に移り住んだ戸数160戸、人数958人、開墾した畑844町歩（約837ha）にも達する「二宮農場」（北海道中川郡豊頃町）を作りました。尊親は明治40年（1907）豊頃町の開拓事業も成功したことから相馬地方にいったん戻りました。さらに東京に行き、その後、仕法に関わる資料や尊徳の教えをまとめた『尊徳全集』の編集にあたりました。そして社会事業や教育にも力をそそぎ大正11年（1922）に亡くなりました。

二宮尊親一家の写真
大正９年（1920）撮影
前列中央の人物が二宮尊親である。
（小田原市　報徳博物館所蔵）

興復社

興復とは「衰を興し廃を復す（衰えたものをあらたに始め、廃れたものを再びもとへもどす)」という意味をもちます。興復社は、報徳仕法の考えを広めることと事業を実施することを目的に組織されました。その事業は各地の開拓事業を助けるために、人々からお金（報徳金）を集めそれをもとに行いました。

尊徳が亡くなってからどうなったの？―二宮家石神村移住―

二宮家住宅（南相馬市原町区　石神生涯学習センター所蔵）

この家は、木造平屋の萱葺きの屋根で約 52 坪（171.6 ㎡）の大きさでした。八畳間が５部屋、五畳半・四畳・三畳が各１部屋でその他土間や、下男部屋がありました。

慶応４年（明治元・1868）、尊徳の子尊行とその家族は、戊辰戦争の被害からのがれるため江戸から中村藩に移り住んできました。その後、家が石神村（原町区石神）に新築され、明治 30 年に孫尊親が北海道に移住するまでの約 30 年間、そこに住んでいました。富田高慶も二宮家の世話をするため、近くに住みました。

二宮尊徳と富田高慶の墓

旧住宅跡（石神生涯学習センター）の東となりに尊徳と高慶の墓があります。尊徳の墓は昭和 30 年（1955）、※百年忌を記念して栃木県日光市の報徳二宮神社にある墓をかたどって建てられたもので、尊徳ゆかりの品物が埋葬されているそうです。同じ墓地内には尊徳の妻歌子、尊徳の子尊行、尊行の妻鉸子、孫尊親の妻モト子の墓もあります。高慶の墓は、明治 23 年（1890）に亡くなったときに建てられたものです。

現在、墓地周辺は石神生涯学習センター石神報徳講座受講生のみなさんにより定期的に清掃が行われています。

尊徳の墓

高慶の墓

清掃風景

※百年忌…安政３年（１８５６）に尊徳が亡くなってから百年目にあたる年。

石神移住のその後…

戊辰戦争の最中の慶応４年（1868）４月、まず尊行の家族が先に移り住みました。移住したのは尊徳の妻歌子、尊行の妻鉸子、尊行の子トセ、尊親、延之助の５名と思われます。尊行は家族のあとを追って２ヶ月後の６月、中村（相馬市中村）に到着しました。藩主の命により上真野村大字橲原（鹿島区橲原）佐藤市右衛門宅で戦争が終わるのを待ちました。明治元年（1868）10 月、次女タカが生まれたので中村にもどり、川原町（相馬市中野）斎藤嘉隆宅に居たところ、藩主相馬季胤（のちの誠胤）は石神村（原町区石神）に新しく家を建て、そこに移り住ませました。さらに、毎年米 300 俵を尊徳の※祭祀料として与えました。

現在の石神生涯学習センターの庭に二つの碑が建っています。

明治４年、尊徳の妻歌子、さらに同年尊行と相次いで病気で亡くなったため、蛯沢村（小高区蛯沢）に土着していた富田高慶は、二宮家の東どなりに移り住み、尊親の家族をそばから協力援助しました。

その後、二宮尊親は興復社社長となり活躍しました。尊親の弟延之助は富田高慶の養子となり、後に高英と名のり、高慶の長女トクと結婚しました。

報徳仕法コラム

二宮家住宅の移転

二宮家の北海道移住後、二宮家住宅は石神村役場に使われていましたが、昭和の初め村勢の発展により手狭になったので、新築されることになりました。いらなくなった旧住宅は市民の岡和田甫氏の努力により原町区西町の現在の福島県立相馬農業高等学校の西に移築され、「二宮報徳殿」とよばれていました。その後も岡和田氏によって管理されていましたが、岡和田高志氏によると昭和 45 年（1970）頃老朽化のため取り壊され、現在は残っていません。

二宮家住宅平面図（日光市　報徳二宮神社所蔵）

富田家宅写真（相馬報徳社所蔵）　昭和 14 年頃撮影

※祭祀料…先祖を祭るためにかかる費用のこと。